

老人力と福音

牧師 山本 護

若い頃フランス左翼の本を読んでいて、そこに引用されていた警句が目にとまりました。「老人は同じことを繰り返し、若者たちは言うことが何もない。退屈なのはお互いさまだ(J.バンヴィル)」。とはいえバンヴィル(1879~1936)は極右の歴史家。私自身はどちらかといえば穏当な左傾きですが、書物の本文は忘れ、引用されたバンヴィルの言葉だけが口をついて出ることは自嘲してしまいます。

「若者たちは言うことが何もない」。あの頃は「なに言ってやがる」と反発し、「老人は同じことを繰り返す」については、「その通りだ」と感じました。少しずつ老人になりつつある今はどうでしょうか。心当たりあります。だからというわけでもありませんが、同じことを繰り返し言うことも悪くないんじゃないか、と思います。

「老人たちよ、これを聞け。この地に住む者よ、皆耳を傾けよ。あなたたちの時代に、また、先祖の時代にも、このようなことがあつたらうか。これをあなたたちの子孫に語り伝えよ。子孫はその子孫に、その子孫は、また後の世代に(ヨエル 1:2~3)」。



時代の転換点。預言者ヨエルは、経験によって現実を知る老人に、苦難の証人になるよう迫ります。だから「同じことを繰り返し」てもいい。いやむしろ預言者が命ずるように繰り返し語り伝えてほしい。思想や観念ではなく、デジタルコンテンツで易々と得られるデータ化された事柄でもなく、自らの経験で得た生きている言葉で伝えて下さい。

晩秋、十字架の前で枯れたアナベル。春夏の瑞々しい花は可憐で美しいけれども、年老いて花がらとなった今こそ雄弁であるような気がします。十字架の言葉は預言者のそれのように苦難だけでも、苦難に隠されている愛の犠牲を、自らの経験と共に手渡したい。枯れた花びらが落ちないよう丁寧に、慎重に手折って伝えたい。

若者が少なく、高齢者が多い諸教会。こんな時代を嘆く人もいますが、福音を「繰り返し、繰り返し」語るのであれば結構じゃないですか。ボヤキではなく福音ならば。Ω